

## 瑞巖寺一〇〇世・洞水東初禪師の頂相について

瑞巖寺 宝物課 主任学芸員 堀野 真澄

はじめに

瑞巖寺一〇〇世・洞水東初禪師は、日向国飢肥（現宮崎県日南市）領主、伊東家の出身と伝わっている。同地の安国寺に出家、のち、瑞巖寺九十九世雲居希膺禪師に参じ、その法を嗣いだ。仙台藩祖伊達政宗公、二代藩主伊達忠宗公、政宗公息女五郎八姫様の深い帰依をうけた洞水禪師は、領内に円通院・天麟院・大仰寺等、現在に残る名刹を開創するだけでなく、本山妙心寺にも三住し、さらには十八名もの法嗣を育てられた。その高德・業績を讃え、死後に「大機円応禪師」と諡されており、瑞巖寺では洞水禪師を再中興開山と位置付けている。

洞水禪師は、言葉・行為の跡を留めない「没蹤跡」が信条だったと伝わっており、その功績を考えれば、現存する資料の数は、極めて少ない。しかし、三五〇年諱法要を厳修するにあたり、事業の一環として調査を行なったところ、これまで知り得なかった資料が数点発見された。

今回、遠諱事業として開催された特別展「瑞巖寺・一〇〇世洞水東初禪師展 没後三五〇年を記念して」に展示された作品のうち、洞水禪師の頂相に焦点を当てて解説する。

頂相とは

禪僧の肖像を「頂相」（「ちんぞう」とも）といい、対象となる像主の生前に描かれたものを「寿像」、死後に描かれたものを「遺像」と呼び慣わしている。禅宗では、法を嗣いだことを示す印可状として、師が自賛した肖像を弟子に与えたことから、多くの頂相が制作された。

形式は全身坐像が最も多く、法衣を着けた僧侶が左右のいずれかに体を向けながら、拄杖を立て掛けた曲象（椅子）に坐し、手に竹篋や扠子を持った姿で描かれる。画面の上部には賛が寄せられ、顔の向きと文の始まりが一致するように着賛される。伝法の系譜を示すもので、寺院の伝統を支える、重要な役割を担う資料である。

展覧会等で展示されることも多い頂相だが、着賛された内容について、翻刻・書き下しまでは行なっても、意訳まで踏み込んだものは数えるほどしかない。また、そもそも賛には全く触れられていないこともある。

頂相は、「画賛」という様式に分類される。「画賛」は、『広辞苑』では、「画にちなんで、その余白に書き添えた詩句など」、「日本国語大辞典」では、「画の余白に、内容を補うように書き添える文章、詩歌」と説明される。

つまり、描かれた絵だけを見る、書かれた文字だけを読む、ということではなく、「なぜ、この絵に対して、このような文章が書かれているのか」

を考察する必要がある。絵と文字と、両方を見て読むことによって、はじめて頂相の解釈が可能になるといえよう。

洞水禪師の頂相は、自賛が三点、他師著賛が四点現存している。翻刻・書き下しを能仁晃道師の『洞水東初和尚集』に拠りながら、七点の作例を制作年代順に紹介する。



① 洞水禪師自贊頂相・筆者不明 寛文六年（一六六六）  
 祥雲寺藏（岩手県一関市） 縦一二二・〇cm 横五五・〇cm 絹本着色

洞水の法嗣・古澗東蒲の需めで制作されたもの。古澗は円通院二世、一関・祥雲寺二世。祥雲寺は一関藩主・田村家の菩提寺で洞水の開山。履の向きが揃っていないのは、席を温める暇もなく法を説き、多くの衆生を教化した師に対する報恩の表れと推測したい。

古澗座元圖山僧老質「來求贊暫時掛焉懶見」乎醜拙乃下筆云「兀兀往來逆順中」天然無眼老村翁「外隨機秉龜毛拂」内却物張兔角弓「用我慢心持正法」因禪定力入圓通「唯嫌揀擇禿丁子」龜行不知古佛風「寛文六丙午年小春日」再住妙心後松島洞水書

古澗座元、山僧が老質を凶き来たつて贊を求む。暫時、焉れを掛く。醜拙を見るに懶し。乃ち筆を下すと云う。兀兀として往來す逆順の中、天然無眼、老村翁。外、機に随つて、龜毛の払を乗り、内、物を却けて、兔角の弓を張る。我慢の心を用つて正法を持し、禪定の力に因つて円通に入る。唯だ揀択を嫌う、禿丁子、龜行、古仏の風を知らず。

寛文六丙午の年、小春の日。再住妙心後松島洞水書す。

弟子の古澗東蒲が私の醜い容貌を描いて来て、そこに贊を求めた。

少しの間、その絵を掛けて眺めてみたが、あまりにも見苦しく、気が進まない。それでも、なんとか筆を執つて書き記すことにした。

どのような状況にあつても一心に修行に努めたというが、所詮は生まれながらの愚か者で、田舎の老いぼれに過ぎない。

世間に対しては龜の毛で作つた払子を持ち、相手に応じて法を説き、自己に対しては兔の角で作つた弓に弦を張つて執着する心を退けたというが、

どちらも実体は伴わず、中身の無いものだ。仏祖の法を護持することによつて妙心寺に再住し、坐禅によつて練り上げられた力量で觀世音菩薩の法門に入り、円通院に住した。

「唯だ選り好みすることを嫌うのみ」とは言うものの、ガサツな坊主にとつて祖師の遺徳など知つたことではない。（然りとて、大法があるからこそ今の自分があるのだ）寛文六年（一六六六）十月、妙心寺に再住し、その後松島に住した洞水記す。



② 洞水禪師自贊頂相・絵所徳栄筆 寛文七年（一六六七）  
 禪興寺蔵（宮城県大和町） 縦二一〇・〇cm 横五二・〇cm 絹本着色

鵬雲東搏の法嗣・大領義猷の需めで制作されたもの。大領は瑞巖寺一〇二世。初め洞水に師事したといい、当初の師弟関係を重視している。禪興寺は大領の開山。祥雲寺所蔵の頂相と同じく履の向きを揃えずに描かれる。絵所徳栄は江戸時代前期の絵仏師。生没年未詳。臨濟・黄檗の宗師の頂相を多く手掛けた。

三尺蛇兮七尺龍「并吞佛祖不充胸」阿呵呵法界無我「漫畫虛空留幻容」陽徳主盟法孫大領座元「圖老僧陋質來乞贊這藟」苴元來は無徳漢更無一「語可加上矣然雖恁麼」默止則似背他孝心故曲「下筆於一華庵中」寛文七丁未年臘八日「再住花園前住松島洞水叟東初

三尺の蛇、七尺の龍、仏祖を并吞して胸に充たず。  
 阿呵呵、法界に我れ無し、漫りに虚空を画いて幻容を留む。  
 陽徳主盟の法孫大領座元、老僧が陋質を画き来たつて贊を乞う。  
 この藟苴、元來、是れ無徳の漢。更に一語の、上加う可き無し。  
 然も恁麼なりと雖も、默止すれば則ち、他の孝心に背くに似たり。  
 故に曲げて筆を一華庵中に下す。  
 寛文七丁未の年、臘八日。再住花園前住松島洞水叟東初。

竹篋を握り、拄杖を立て掛けた椅子に坐したその男、仏も祖師も一息に呑み込んだようだが、それでも心は満たされまい。

ワツハツハ！この広大な全宇宙に「我」というものは無い。  
 徒に姿を描くなど、全く以て無駄なことをしたものだ。  
 陽徳院住持、孫弟子の大領和尚が私の醜い容貌を描いて来て贊を求めた。  
 私はガサツ者なので、徳などというものは元々持ち合わせていない。  
 それなのにどうして、贊を記すことが出来るだろうか。

そんな物は必要ないと思うが、断れば師を慕う気持ちを無下にしてしまう。  
 そこで、意にそぐわないが、一華庵において書き記すものである。  
 寛文七年（一六六七）十二月八日。妙心寺に再住した先の瑞巖寺住職、洞水東初。



③ 洞水禪師自贊頂相・筆者不明 寛文九年〜十一年（一六六九〜七一）  
石馬寺蔵（滋賀県東近江市） 縦一〇七・六cm 横四六・九cm 絹本着色

洞水の法嗣・龍光東済の需めで制作されたもの。龍光は石馬寺三代で、寛文九年十二月の前堂転位。洞水の妙心三住も寛文九年であることから、この年以降の制作。当資料を所蔵する石馬寺は聖徳太子有縁の寺院で、正保元年（一六四四）、雲居を中興開山とし、洞水を二代とする。

絳衣紫服汝爲誰「三住花園老阿師」 嘸「持鉢分衛吾素履」 破家散宅是生涯「説玄説妙亦無據」 問道問禪總不知「茫茫業識未曾斷」 眼上元來橫兩眉「錯錯」 雲居何打矮閣梨「咄」 石馬寺龍光濟首座繪「山僧陋質請讚仍漫書」 洞水東初老衲

絳衣紫服、汝をば誰とか為る、三住花園の老阿師。嘸。

持鉢分衛、吾が素履、破家散宅、是れ生涯。

玄を説き妙を説くも亦た 抛 無し、道を問ひ禪を問うも総て知らず。

茫茫たる業識、未だ曾て断ぜず、眼上、元來、兩眉横たう。錯錯。

雲居、何ぞ矮閣梨を打す。咄。

石馬寺の龍光濟首座、山僧が陋質を繪いて讚を請う。仍つて漫りに書す。洞水東初老衲。

赤色の袈裟と紫色の衣を身に纏ったこの男は何者か、三度も妙心寺に住したという  
老いぼれ爺よ。これこれつ、乞食の行である托鉢を自己の本分とし、その禅機を  
もつて大悟徹底したと思つてゐるそうだな。

だが、仏法を説いても柱となるところはなく、禅について尋ねられても分からないこと  
だらけではないか。湧き上がる妄想は果てしなく広がり、断ち切れたことは今までに  
一度もない。このように、迷いがある為に誰もが仏性を備えていることに気付く  
ことができないのは、遠くまで見渡せる眼が、すぐ上に生えている眉毛を見ることが  
できないのと同じことだ。お前さんは間違いだらけでもものになつていない。  
だからといつて雲居め、衲を打つことはなかつただろうに。こらつ。

（いや、先師・雲居和尚が叩いてくれたからこそ、今の自分があるのだ）

石馬寺の龍光東済が私の醜い容貌を描いて賛を求めたので、思うがままに書き記した。  
洞水東初。



④ 洞水禪師頂相 虚櫛了廓贊・絵所徳栄筆 寛文十三年（一六七三）  
瑞巖寺蔵（宮城県松島町） 縦一〇一・二cm 横三九・五cm 絹本着色

洞水の法嗣・東亮首座の需めで制作されたものだが、『宗派図』に「東亮」の名は無く、「西山慧亮」のことと思われる。西山は大仰寺四代。寛文十三年は洞水の大祥忌（三回忌）にあたる。贊者・虚櫛は日向国の出身。江戸・東禅寺で洞水と同参だった。

前三住花園第一百七十七世洞水和尚號「大機圓應禪師曾住奥州松島之名藍」瑞巖山圓福禪寺光闡化門後晦跡於「天麟杜絶世諦曠然自適寂爾他化建」塔富山之絶境 師之上足東亮首座「為塔司因是令畫工図 師之真千里持」来就于余請贊以余之與 禪師舊同「参故不克固辞謾製俚語以償其責云」爾 贊曰「洞水洋溢 懷山襄陵」三回拈起 法山烏藤「一生剔點 瑞巖正燈」嘆「東海西州通派脉龍孫鳳子幾」繁興「惟時寛文十三癸丑仲夏之日 前再住」法山虚櫛了廓謹拜贊

前三住花園第一百七十七世洞水和尚、大機円応禪師と号す。曾て奥州松島の名藍、瑞巖山円福禪寺に住し、光いに化門を闡く。後に跡を天麟に晦まし、世諦を杜絶し、曠然として自適し、寂爾として他化す。塔を富山の絶境に建つ。師の上足、東亮首座、塔司と為る。是れに因りて画工をして、師の真を図かしめ、千里、持ち来つて、余に就いて贊を請う。余、之れ禪師と旧く同参なるを以て、故に克く固辞せず。謾りに俚語を製し、以て其の責めを償うと云爾。贊に曰わく、  
洞水洋溢し、山を懷み陵に襄る。三回拈起す、法山の烏藤。一生剔点す、瑞巖の正燈。  
嘆。東海西州、派脈通じ、龍孫鳳子、幾たびか繁興せん。  
惟れ時、寛文十三癸丑の仲夏の日。前再住法山虚櫛了廓、謹んで拝し贊す。

妙心寺第一七七世となり本山に三住した洞水和尚は、大機円応禪師号を諡された。かつては奥州松島の名刹、瑞巖山福禪寺に住持した。多くの衆生を教化した後、天麟院に退居して世俗との交流を絶ち、悠々と過ごした。死後、墓を人里離れた富山に建て、洞水和尚の高弟、東亮首座が墓守となつた。東亮首座は絵描きに洞水和尚の肖像を描かせ、千里もある遠い道のりをやって来て私に贊を求めた。私と洞水和尚はともに学び修行した間柄なので、断るわけにもいかない。（本来は洗練された言葉で偈を作らなければならぬが、その素養が無いので）下手な言葉を弄して偈を作り、その求めに応じるものである。贊に曰う、

「洞水和尚の並々ならぬ力量は、まるで水が丘に上がるかのように満ちあふれている。その才幹を存分に發揮し、妙心寺に三度住職した。一生を仏法のために捧げ、生涯、瑞巖寺の正灯を掲げた。ああ、その門下は日本中に広がって、優れた弟子達が宗門を盛んにするだろう」と。

時に寛文十三年（一六七三）五月、妙心寺に再住した虚櫛了廓、謹んで拝し賛を記す。



⑤ 洞水禅師頂相 鵬雲東搏賛・絵所徳栄筆 延宝五年（一六七七）  
 濟興寺蔵（宮城県東松島市） 縦一一・〇cm 横三六・〇cm 絹本着色

鵬雲の法嗣・密付丁旨の需めで制作されたもの。密付は円通院三世で、洞水の孫弟子。当資料を所蔵する濟興寺は洞水の弟子・仲叟が中興開山と伝わる。賛語は妙心三住として上山した洞水が成道会で述べたものであり、着賛の経緯を文中に記す。

將謂面南見北辰」反然亡境也亡人」虚空夜半説冤苦」無齒大虫嚙石麟」延寶丁巳歲臘月密付座元」圖先師洞水老禪之嚴相來乞」贊翁不贊有先師佛成道偈」拜書與」住瑞巖嗣法の子鵬雲東搏

將に謂えり、南に面つて北辰を見ると、反然として境を亡じ也た人を亡ず。  
 虚空、夜半に冤苦を説く、無齒の大虫、石麟を嚙む。  
 延宝丁巳の歳の臘月、密付座元、先師洞水老禪の嚴相を圖き來たつて賛を乞う。  
 翁、賛せず。先師の仏成道の偈有り。拜書して与う。瑞巖に住す嗣法の的の子鵬雲東搏。

（障子に差し込む旭日を見て悟ったと言うが、）言うなれば、南を向いて北極星を探すようなもので、とんだ見当違いだ。ただ、裏を返せば、それは主観と客観の対立が完全に消滅したところで、これぞまさに禅の境界である。同門の僧より謂れのない誹りを受けたが、それは歯抜けの大虎が石の麒麟に噛みついたようなもので、本当に優れた人物の禅機には敵わない。  
 延宝五年（一六七七）の十二月、密付丁旨が亡き師、洞水禅師の峻厳な姿を描いて来て賛を求めた。そこで、衲の拙い賛ではなく、師が成道会の際に述べられた偈を謹んで書き記した。瑞巖寺住職、洞水禅師の法を継いだ弟子・鵬雲東搏。



⑥ 洞水禪師頂相 木庵性瑠贊・絵所徳栄筆 延宝八年（一六八〇）  
大仰寺蔵（宮城県松島町） 縦一〇四・〇cm 横三七・〇cm 絹本着色

正面向きに描かれた黄檗様の画像。妙心三住時に宇治・萬福寺を訪ねた洞水は隠元隆琦・木庵と詩の応酬を行い、互いに力量を認め合ったという。遷化後、両師より挽詠が贈られた。大仰寺は洞水の開山で、塔所が営まれる。雲居派と黄檗禅との交流を示す貴重な資料だが、来歴未詳。前述①⑤のように着賛の経緯が記されておらず、需めに応じての制作ではないと考えられる。内容は洞水を顕彰・追慕したもの。着賛が行われた延宝八年、木庵は萬福寺住持を慧林性機に譲り、山内の紫雲院に退隠している。妙心寺に反黄檗の立場を取る者が多かった中、現役の住持として初めて萬福寺を訪ねた洞水に対する感謝の念が木庵にあり、昔日を偲び頂相を制作し、遠く松島の地に贈ったのであろうか。

\* 洞水和尚影像讚 戒潔如雪禪最若月 雪月交光與爲軌法 臨末説偈得大活後 我書讚言等九華 一種是須彌上一掇 庚申仲冬至日 黄檗木庵住山僧 手題

\* 洞水和尚影像の讚。戒の潔きこと雪の如く、禪の最ること月の若し。雪月、光を交え、与に軌法と為る。臨末、偈を説いて、大活復を得たり。我が書する讚言、九華に等し。是れを須彌上に種えて一掇せよ。庚申仲冬至日、黄檗木庵住山僧、手ずから題す。

\* 戒律を守ること雪のように清らかな心身を保ち、坐禅によって練り上げられた力量で、月の光のように辺りを照らす。禅戒共によく護持して大いに皆の手本となり、末期に臨んで優れた偈頌を呈し、死してなお宗風を挙揚した。

それに比べて、私が書いた偈頌などは霜にしおれた菊のようなもので、取るに足らないものではあるが、これを洞水和尚がいらっしやる須弥山に移し植えて、餞としよう。延宝八年（一六八〇）十一月冬至日、黄檗山内・紫雲院に住する木庵、自ら記す。



⑦ 洞水禅師頂相 龍光東濟贊・筆者不明 享保十二年(一七二七)  
石馬寺藏(滋賀県東近江市) 縦九九・九cm 横四二・〇cm 紙本着色

洞水遷化より五十六年後となる享保十二年の制作。石馬寺の法系に、「龍光は雲居の法嗣」とあるが、前堂転位における師は洞水。③に見たように、石馬寺には洞水自贊の頂相が遺されているが、師に対する報恩の心が、時を経て再び制作を決意させたと推測される。

\*

此以小像融通大機「豎應三際横亘十方」虚空體性事事無碍「平生作用無量無邊」喝  
妙心第一座石馬久住「融通軒主龍光老濟」九十六載書」于時享保十二丁未孟陽吉旦

\*

此に小像を以て、大機を融通す。豎には三際に応じ、横には十方に亘る。  
虚空の体性、事事無碍。平生の作用、無量無辺。喝。  
妙心第一座、石馬久住、融通軒主龍光老濟、九十六載にて書す。  
時に享保十二丁未の孟陽吉旦。

\*

絵に収まるほど小さな姿でありながら、並外れて自由自在なその境涯は、時間も空間も全てを超越し、至る所に満ち満ちている。(それもそのはず、)虚空の本質とは、お互いに融け合って何物をも妨げないこと。日常底においても、そのはたらきは計り知れないぞ。こらっ！

妙心寺の第一座、石馬寺に長く住した融通軒の主・龍光東濟、九十六歳にてこれを記す。享保十二年(一七二七)一月吉日。

おわりに

以上、洞水禅師の自贊頂相三点、他師著贊四点について、解説を加えて紹介した。①は寿像の自贊頂相であり、直接の弟子、兄弟弟子、孫弟子に対する印可状の役割を担うものである。④⑦は遺像の他師著贊で、⑤は印可状の役割を担うが、④⑥⑦については顕彰・追慕、また、年忌法要で用いるために制作されたものと推測される。石馬寺所蔵の③⑦は、三五〇年諱の資料調査を通じてその存在を確認することが出来たものであり、飛び領地についての考察も必要であることを認識させられた。今後は、末寺だけではなく、法縁の寺院も対象にした、広い視点での研究を行なっていきたい。

令和四年(二〇二二)二月